

都道府県別賞一等

遠くて近い生命保険

山口県 宇部市立川上中学校 一学年

山村 深咲

私は、この夏休みに作文を書くことについて考えたとき、今まであまり耳にしたことがなかった生命保険について書いてみようと思った。生命保険という言葉は聞いたことがあるものの、どんなものなのか全くわからなかった。そこで、母と話をしてみることにした。母は言った。

「生命保険にも色々あると思うけど、お母さんが知っているのは、誰かが亡くなったときに保険金が出たり、家を建てるときに、もし途中で亡くなってしまっても残りの住宅ローンは保険会社が支払ってくれたりする、そういう保険かな。」

私は聞いてみた。

「私の家はどうかなの。」

実は、私は父を病気で亡くしている。今まで考えてみたこともなかった生命保険というものが、急に身近なものに感じられた。母は今回私がこの話題を出すまで、こういうことについては全く話したことがなかった。母の話についてまとめてみるとこうだった。まず、父は母と結婚する前に大きな生命保険に入っていた。しかし毎月たくさんの保険料がかかったので、二人で相談して小さな生命保険に変えてしまった。また、家を建てるとき、団体信用生命保険という保険に入らないと父が言い出した。母は不安に思い、このことについては反対したが、父にも事情があり、結局その保険には入らなかったらしい。私はこの話を聞いて、とても驚いた。

「えーっ。じゃあうちはどうなったの？」

「お父さんの代わりにお母さんが、今も住宅ローンを返し続けているよ。」

母は軽くそう話すが、きつとこれは母にとって本当に大変なことだと思う。私は今までそんなことを全く知らなかったが、母は私の知らないところで、私にはそんな様子を全く見せず、一人でがんばってくれていたのだと思うと、今回こういう話を母とすることができて良かったと思った。母は言う。

「お父さんもお母さんも誰も悪くない。ちょっと不幸が重なってしまっただけ。今、こうやって幸せに普通に生活できているのだからお母さんはいいと思うよ。」

私もそう思う。父もまさか自分がそんなに早く病気になるって亡くなってしまうとは夢にも思っていなかっただろう。母も同じだと思う。だから誰も悪く

第54回中学生作文コンクール

ない。私も普通に中学校生活を楽しんでいる。ただ私が思ったのは、生命保険というものは普段あまり身近なものではないが、そして誰かが亡くなったときのことなど考えたくはないけれど、もしそうなってしまったときには、残された家族のそれからの生活や苦勞が、それによって全く違ってくるものだとしたことだ。

今回、母から聞いた話がもう一つある。母は、父が亡くなったとき、自分の生命保険に入ったということだ。それを聞いたとき、少し複雑な気持ちになった。母は、

「お母さんにもしものことがあったとき、あなた達が困らないように。」

と言うが、正直なところ母に「もしものこと」が起ころるなど考えたくない。もちろん家族はみんな長生きして生命保険のお金なんかもらわないですむ方が良いに決まっている。けれども生命保険の大切さも、そして、私達のことを考えてくれている母に感謝しないといけないこともわかった。

私は、この夏休み生命保険についての作文を書こうと思わなければ、これからも長い間生命保険について、また母が実際に経験したことについても知らないままだったと思う。私は今回、母の話聞いたことはとても良かったと思う。まだまだ先になるけれど、私が将来大切な家族のために生命保険についてしっかり考えるためのとても良い勉強になったと思う。